

JSPS Stockholm Newsletter

2015 Spring



Vol. 46

Prologue

01

文化・学術薫るスオミ

News

02

2014年度第2回IVA-JSPSセミナーの開催/ スウェーデン同窓会セミナーの開催/ スウェーデン同窓会ボードミーティングの開催/ Japan Alumni Forum(フィンランド)開催/ 在スウェーデン日本人研究者の会開催/ JSPSサマープログラム プレオリエンテーション開催/クラフォード賞2015/セミナー“Research and Study Possibilities in and on Japan”の開催/ フィンランド同窓会セミナーの開催/シンポジウム“Human brown adipose tissue and obesity”の開催

Reports

07

IVAセミナー講演および講演会でお会いした方々
/Sweden-Japan Seminar on Nanomaterials and Nanotechnology(SJS-Nano)/Research Sources on Language Teaching and Politics- Japanese language education in Pre-war Europe-/持続可能な製品・サービス開発と提供・日瑞協力の有望分野/ コラム(1)~ Royal Wedding ~/コラム(2) ~吉祥? 白黒付かないカササギ~/ その他打合せ・来会等

*Academic
Information*

14

日本人研究者3名がマルクス・ヴァーレンベリ賞を受賞/ノーベル賞2015発表日程の決定/Olli Kallioniemi教授がSciLifeLab新Directorに就任/デンマーク: EU Horizon2020事業から11億デンマーククローネの資金を獲得/ノルウェー: 第5回日本・ノルウェー科学技術協力合同委員会/ノルウェー: 日本を含む8か国との国際交流プログラムに7千万ノルウェークローネ/ノルウェー: 英語能力低下の傾向/フィンランド: ギャップイヤーは、その後の大学生活に悪影響はない/フィンランド: 留學生が選ぶ欧州での留学先NO.1に選ばれる/アイスランド: エネルギー問題について、日本へ助言/エストニア: タルトゥ大学がQSランキング地域版で5位にランクイン/ KI Bladet

Notice

19

イベント予定
事業のご案内
着任のご挨拶
カロリンスカ研究所同窓会 会員募集
JSPS Stockholm Newsletter 定期購読

文化・学術薫るスオミ

JSPSストックホルム研究連絡センター長 阿久津 秀雄

トラムが風情のある建物の間をゆったりと走っていく。ヨーロッパの古い都会によく見られる光景である。しかし、トラムが走り抜けるヘルシンキの街々の建物はまだ歴史の重みを感じさせるとは言いがたい。ヘルシンキを首都とするフィンランドはヨーロッパの中では新しく、しかもかなりユニークな国である。フィン人は自らをスオミと呼ぶ。その言葉はウラル語系に属し、周囲の言語とは本質的に異なる。常にゲルマンあるいはスラブ系の国に支配され、1917年になってやっと自分達の国を持つことができた。北極圏で今も独自の生活と文化を守るサーミ人と異なり、北欧のアーリア人種と混血し、宗教、生活もヨーロッパ化した。体型もアジアの面影を残しつつも金髪碧眼の北欧人に変わった。「赤い靴はいてた女の子」を思い出させる。しかし、完全に同化することではなく、独自の文化と民族意識を持ち続けた。独立後も、歴史を反映した複合文化国家としての特徴を維持している。トラムの駅名を含めて全ての表示はフィンランド語とスウェーデン語で書かれており、スウェーデン語専用の教育機関もある。ラップランドではサーミ語が用いられる。主要な宗派としてはルター派キリスト教会とともにギリシャ正教系が活動しており、ルター派大聖堂前の広場にはロシア皇帝アレクサンドル二世の銅像が建っている。

新生フィンランドは戦争に次ぐ戦争という不幸に見舞われる。しかし、自分たちの国を育てようという国民の強い決意がこの困難を乗り越えて、フィンランドを独自の文化を誇る先進工業国に変えた。それを成し遂げる決め手となったのは教育である。学校をたくさん作り、落ちこぼれをなくす教育システムにより国民全体の文化・知識レベルを向上させた。その成果は目覚ましく、OECDの学習到達度調査(PISA)で常にトップレベルにランクされるようになる。さらに大学等の高等教育を充実させて高度な知識を持つ働き手を数多く送り出した。フィンランドアカデミーが数年おきに出している「フィンランドの科学研究の現況」という報告書によると、2008年のOECD調査では全被雇用者に占める研究者の数がフィンランドはOECD平均の倍を越えて飛び抜けている。国民一人あたりの学術論文数もOECD平均の倍近くである。このような研究開発重視の取り組みの中からノキアをはじめとする先端産業が育っていった。



ノキアの携帯電話部門はマイクロソフトに買収されたが、2015年発表のBloomberg世界イノベーションランキングでもフィンランドは総合で4位、研究人材では1位にランクされている。この間、文学ではムーミンのヤンソン (Tove Jansson)、ノーベル文学賞のシランペー (Frans Eemil Sillanpää)、音楽ではシベリウス (Jean Sibelius)、建築ではアールト (Alvar Aalto) 等、多くの人々による活発な文化活動が世界に感動を与えた。困難に耐えて来たスオミの地に新しい文化が花開いている。

建国100年を来年迎えるフィンランドの中で、375年の歴史を持つヘルシンキ大学は特別な存在である。独立前からフィンランドの文化・学術の中心であり、独立後は国づくりの人材を輩出してきた。同大学は北欧でも古い歴史を誇り、2名のノーベル賞受賞者を出している。学長のJukka Kola教授は今年の年次スピーチ(2015.03.26)でフィンランドの高等教育と研究水準の現状に強い危機感を表明した。中国、韓国等の新興諸国が高等教育と研究分野でも勃興している中でフィンランド社会をさらに発展させるためには、今までの成功に安住しない大胆な改革が必要であると訴えている。人口約550万人という小規模国家を踏まえ、戦略的に重点分野を絞り、足りないところは国際協力で強化すること、国内は勿論、世界から優秀な学生と研究者を集めて教育と研究の質を抜本的に向上させることが重要だと指摘している。これはフィンランドアカデミーの2014年版報告書が指摘していることと重なる。国際協力では最近注目すべき動きがあった。今年の7月、スウェーデンの重点国家プロジェクトであるScience for Life Laboratoryの所長に現 Institute for Molecular Medicine Finland所長の Olli Kallioniemiヘルシンキ大学教授が就任することになった。両国の太いパイプとなることが期待される。

フィンランドは言葉、歴史、人口の壁を越えて世界に貢献できる国づくりを目指している。それを支えるのはユニークな複合的文化であり、科学的考え方と知識を重んじる国民性である。積み重ねられてきたわが国との学術交流が文化・学術薫るスオミのさらなる発展に貢献するとともに、わが国の学術の在り方の議論にも資することを願っている。

2014年度第2回IVA-JSPSセミナーの開催

IVA-JSPSセミナーは、著名な研究業績を有する日本の研究者を招聘し、現地学術・経済関係者における日本の科学技術水準の高さへの関心喚起、当該分野における両国間の学術交流の推進等を目的とする講演会である。

2014年度2回目となる今回は、JSPSストックホルム研究連絡センター、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)、在スウェーデン日本国大使館、瑞日基金、日本化学会の共催で2015年3月9日に、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)において、小島康一トヨタ自動車株式会社技術開発本部FC技術・開発部主査を招聘し、“Fuel-Cell Vehicles – the Solution for Fossil Free Transportation?”をテーマとした同セミナーを開催した。

セミナーでは冒頭のGöran Lindbergh王立工科大学教授によるイントロダクションに続き、小島主査による講演のほか、Karin Byman氏(Head of Sustainable Building Management, ÅF)、Cecilia Wallmark氏(Section Manager, Energy Strategies, SWECO)およびHans Patterssonスウェーデン企業開発省課長補佐によるパネルディスカッションが行われ、同セミナーのテーマについて活発な意見交換の場となった。

(p7)に小島主査によるレポートを掲載)



パネラー



パネルディスカッションを踏まえた質疑応答



Tiwari博士による講演



参加者による集合写真

スウェーデン同窓会セミナーの開催

2015年3月10日～11日の2日間にわたり、リンショーピン大学においてNanomaterials and Nanotechnology (SJS-Nano)をテーマにスウェーデン同窓会(SAC) Activity Seminarが開催された。スウェーデンの研究者および日本の研究者計22名が会場もしくはインターネットを利用した遠隔セッションにて講演を行った。

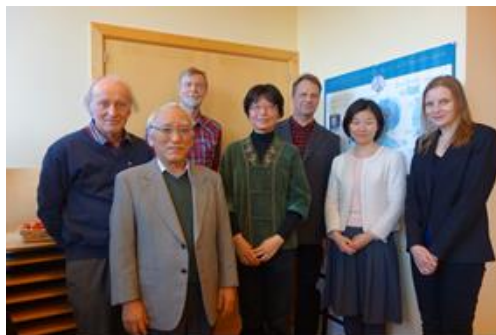
10日は、セミナーオーガナイザーのDr. Ashutosh Tiwariの開会挨拶に始まり、阿久津センター長がJSPS事業紹介を行った。続いて、スウェーデン人研究者、日本人講師として招へいた小林尚俊物質・材料研究機構 MANA-ナノライフ分野生体機能材料ユニット 高次機能生体材料グループ グループリーダー、阿久津センター長による講演が行われた。11日には会場での講演の他、遠隔セッションも行われ、両日合わせて約60名の研究者が参加した。

(p8)に小林グループリーダーによるレポートを掲載)

スウェーデン同窓会ボードミーティングの開催

2015年3月16日に、JSPSストックホルム研究連絡センターにおいて、JSPSスウェーデン同窓会ボードミーティング(幹部会)が開催された。2015年度に開催する同窓会セミナーについて、応募内容や投票結果を元に採用順位を決定した。続いて同窓会の運営方法や新しい幹部会メンバーの選挙の実施方法、2015年度開催予定のスウェーデン同窓会設立10周年記念会合について意見交換が行われた。

ボードミーティングに続いて、10周年記念会合に関するワーキンググループのミーティングを開催し、Chairの選出とイベントの内容について意見交換が行われた。



ボードミーティング参加者

Japan Alumni Forum(フィンランド)開催



Gaensシニアリサーチフェローによる講演

フィンランドには、留学、交流事業、仕事等で日本滞在経験を有する方が多い。そこで、2015年3月19日にヘルシンキにおいて、在フィンランド日本国大使館とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で日本に一定期間(6か月以上)滞在した経験のある方を対象に、Japan Alumni Forum(JAF)を開催し、146名が参加した。

同イベントでは、篠田研次在フィンランド日本国大使の挨拶に続き、Dr. Bart Gaens Finnish Institute of International Affairs シニア・リサーチ・フェローによる“Tezuka Osamu - Pioneer of Japanese Pop Culture”、及び阿川淳之JAL欧州・中東地区支配人室ヘルシンキ支店総務セクションマネジャーによる“Planning your next trip to Japan – suggestions from JAL –”の講演が行われた。その後、レセプションが開催され、様々なバックグラウンドを持つ参加者間で積極的に情報交換をする姿が多く見られた。

在スウェーデン日本人研究者の会開催

2015年4月16日、ストックホルム市内において日本人研究者の会が開催された。幹事を務める佐藤政文在スウェーデン日本国大使館一等書記官、川窪百合子JSPSストックホルム研究連絡センター副センター長の呼びかけにより、ストックホルム市内及び近郊の学術研究機関に所属するおよそ30名が参加した。冒頭、佐藤政文一等書記官より、日本人研究者の会が、在スウェーデン日本人研究者間の交流や、気軽な情報交換の場となることを期待する旨の開会挨拶があった。その後、参加者による自己紹介や帰国予定者・着任者の挨拶が行われ、様々な機関で研究を行う研究者が活発に情報交換を行った。

この会が契機となり、研究者間の交流がより活発になることを期待するとの阿久津センター長の挨拶をもって閉会となった。



日本人研究者の会

JSPSサマープログラム プレオリエンテーション開催



サマープログラム プレオリエンテーション

2015年4月29日、The Swedish Foundation for International Cooperation in Research and Higher Education (STINT)において、JSPSサマープログラムの参加者を対象に渡航前オリエンテーションを開催した。

オリエンテーションでは、Andreas Göthenberg STINT事務局長の開会挨拶に始まり、プレオリエンテーション参加者全員による自己紹介、JSPS東京本部の貴船永津子国際事業部人物交流課企画調整係員によるJSPSのプログラム説明、2014年度サマープログラム参加者2名による経験談、質疑応答、阿久津センター長によるストックホルムセンターの紹介、Hans Pohl STINTプログラムダイレクターによるSTINTの紹介が行われ、阿久津センター長による閉会の挨拶をもってプログラムが終了した。プログラム終了後は和気藹々とした雰囲気の中レセプションが行われ、情報交換とネットワーキングの場となった。

クラフォード賞 2015

2015年5月6日、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)において、クラフォード賞2015の授賞式が開催され、スウェーデン国王カール16世グスタフ陛下から太田朋子国立遺伝学研究所名誉教授とリチャード・レオンティン・ハーバード大学名誉教授(代理出席)に賞が授与された。前日の5日には、記念シンポジウムが同会場で開催され、太田名誉教授の「進化における『ほぼ中立』—遺伝子型と表現型をつなぐ」と題する講演に聴衆は熱心に聞き入っていた。また、7日には、ルンド大学においてクラフォード賞を記念し、国内外の遺伝子科学関連の研究者を招へいた受賞記念講演会が開催された。

同賞は、人工腎臓の発明者であるHolger Crafoordとその妻であるAnna-Greta Crafoordによって1980年に設立された賞で、天文学・数学・地球科学・生物学・関節炎に関する基礎研究の推進を目的としている。ノーベル賞が扱わない上記領域を補完するとされ、毎年1つの分野に対して授与される。



記念シンポジウムで講演する太田名誉教授



クラフォード賞の親授

・クラフォード賞(英語版)

www.crafoordprize.se/events.4.2f692b3510dbf339680003497.html

・スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)ウェブサイト(英語版)

<http://www.kva.se/en/Prizes/Crafoord-Prize/>

・国立遺伝学研究所ウェブサイト

http://www.nig.ac.jp/nig/ja/2015/06/prizes-and-awards_ja/20150519.html

・スウェーデン王室ウェブサイト(英語版)

<http://www.kungahuset.se/royalcourt/royalfamily/latestnews/latestnews/thekingpresents-thecrafoordprizeinbiosciences.5.36257d1d14c9d87d3cd38e6.html>

セミナー“Research and Study Possibilities in and on Japan”の開催

JSPSストックホルム研究連絡センター、在フィンランド日本国大使館、北海道大学ヘルシンキオフィスの共催で、2015年5月11日、ヘルシンキ大学(フィンランド)においてResearch and Study Possibilities in and on Japanをテーマにセミナーを開催した。セミナーには、100名を超える参加者が集まった。

成田吉弘 北海道大学ヘルシンキオフィス所長による開会挨拶及び“Kansei(感性) – Engineering”と題する講演に続き、小川誉子美 横浜国立大学教授による“Research Sources on Language Teaching and Politics – Japanese Pre-war Teaching in Europe”、齋藤直子 京都大学准教授による“Lost in translation? Addressing internationalization today”と題した講演等が行われた。



川窪副センター長による講演



左から: 齋藤准教授・小川教授・川窪副センター長

午後の部では、川窪百合子JSPSストックホルム研究連絡センター副センター長からセンターの事業概要や開催予定のセミナー、フェローシッププログラム等についての講演が行われ、Kristiina Jokinen JSPSフィンランド同窓会長から同窓会活動についての紹介があった。続いて、Ulla Ellmen フィンランドアカデミー科学アドバイザー、加藤裕二 科学技術研究機構(JST)パリ事務所長、Merja Hiltunen フィンランド技術庁(Tekes)事業・ネットワーク活動戦略支援部長から各機関の概要及び研究助成について説明があった。また、フィンランド人元国費留学生やJSPSフェローシップ経験者から、日本での経験を紹介する場が設けられた。

(p9に小川教授によるレポートを掲載)

フィンランド同窓会セミナーの開催

2015年5月21日、トゥルク大学(フィンランド)にて“Future Diagnostics”をテーマにフィンランド同窓会セミナーを開催した。

本セミナーは、JSPSフィンランド同窓会が中心となり、JSPSストックホルム研究連絡センター、トゥルク大学技術研究センター、トゥルク応用科学大学及びトゥルク市の共催で開催された。

Timo Korpela トゥルク大学教授のイントロダクションに続き、ゲストスピーカーである芝崎誠司 兵庫医療大学准教授による“The Recent Challenges in Red Biotechnology – for Accelerating the Development of Novel Diagnostic Tools and Pharmaceuticals”、Erkki Soini トゥルク大学名誉教授による“New Principles for in vitro Diagnostics”と題した講演の他、4名による講演が行われた。また、阿久津センター長によるセンターの事業概要について講演が行われた。セミナーには、学生、研究者および企業関係者約50名が参加し、同分野への関心の高さを伺わせた。

(報告は、次号(47号)に掲載予定)



芝崎准教授による講演

シンポジウム“Human brown adipose tissue and obesity”の開催

JSPSストックホルム研究連絡センター、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)、ストックホルム大学、北海道大学の共催で、2015年6月2日、KVAにおいてヒト褐色脂肪組織と肥満をテーマにシンポジウムを開催した。シンポジウムには、約50名の参加者が集まった。

Barbara Cannon KVA長官の開会挨拶、KVAの概容説明に続き、Jan Nedergaard スtockホルム大学教授による“Human brown adipose tissue, a short history”、斉藤昌之北海道大学名誉教授による“Brown adipose tissue in small rodents, dogs, and humans”と題した講演が行われた。その他、スウェーデンをはじめ、フィンランド、デンマーク、オランダから10名の研究者が講演を行った。聴衆は熱心に聞き入り、講演後には活発な質疑応答が行われた。

(報告は次号(47号)に掲載予定)



Cannon長官による挨拶



斉藤名誉教授による講演



シンポジウム参加者による集合写真

IVAセミナー 講演および講演会で会った方々

トヨタ自動車(株) FC技術・開発部 主査 小島 康一

スウェーデンと日本の交流に貢献できたかもしれないと感じた有意義な一日を過ごさせていただきました。その一日を簡単に振り返り、その中で感じたことを含めて報告させていただきます。

弊社では1992年に燃料電池開発に取り組み始めました。私は後半の10年関わってきました。昨年末に燃料電池車(Fuel Cell Vehicle、以降略してFCV)のMIRAIを発売開始してから、大変多くの方々に関心を持っていただくことができました。FCVの発売に当たり、燃料はお客様になじみの無い水素を利用することになりますので、水素インフラ整備を同時に進めることが大変重要だと考えておりました。車への補助金だけでなく、水素ステーション整備に向けた政府の支援により日本では四大都市を中心に100箇所の整備をエネルギー会社の方々に進めていただいている真っ最中です。

そんな取り組みをしているときに、今回の講演のお話をいただき、お役に立てるお話は何かと考えたとき、MIRAIに使っている技術の中でスウェーデンという場所に相応しいテーマとして低温始動性について過去の開発経験を含めて発表させていただくことで、FCVをより身近な技術と感じていただくことができるのではないかと考えました。

この会には、在スウェーデン日本大使館の森元大使も出席され、活発な質疑を含めてあっという間に時間が過ぎていきました。講演終了後には多くの方から面白い発表だったとの感想をお聞かせいただくことができ、一安心いたしました。私の講演に続いて、水素ステーション建設についての講演とスウェーデンでのFCVを含めた水素社会についてのパネルディスカッションが行われ、技術開発だけでなく再生可能エネルギーを使ったPower to Gasの考え方や水素利用の政策的な取り組みの姿勢など、多岐にわたる活発な質疑が行われ、座長を務められたProf. Lindberghの巧みなやり取りに感心しながら聴講しておりました。パネルディスカッションの中で日本の状況の質問には、私の知っている限りの解答をさせていただきました。

FCVの発売が日本だけでなく、スウェーデンでのこのような議論が行われるきっかけとなったことに改めて驚きを感じる。同時に、スウェーデンだけでなく欧州での再生可能エネルギーとしての水素の位置づけの大きさを改めて感じることができた講演会でした。

講演会終了後の会食は、シャンデリアの輝く会場で参加者の方々とお話をさせていただきましたが、講演会での質疑に引き続き、活発な意見交換がなされ、大学で研究をされた方からは、自分の研究が社会に役立つことが示されたことを名誉に思うとのご意見もいただくなど、基礎研究を担当されている方々にもFCVの発売が共感を持っていただけであることを実感いたしました。

今回のIVAセミナーを支えていただきました川窪さん、日本学術振興会のストックホルム研究連絡センターのセンター長の阿久津大阪大学名誉教授は、講演前に私をリラックスさせていただいていただけでなく、多くの方のご支援をいただきましたので、この場をお借りして感謝させていただきます。

FCVは市場に投入し始めたばかりです。今後も継続して開発を続けお客様に受け入れていただける商品を提案し続けたいと考えていますので、ぜひいろいろなアドバイスをいただきたいと思います。



小島主査による講演

Sweden-Japan Seminar on Nanomaterials and Nanotechnology(SJS-Nano)

物質材料研究機構 WPI-MANA グループリーダー 小林 尚俊

2015年3月10日・11日の両日、JSPSストックホルムのサポートを受けスウェーデン・Linköping大学においてナノマテリアル及びナノテクノロジーに関するセミナーSweden-Japan Seminar on Nanomaterials and Nanotechnology(SJS-Nano)を開催した。

筆者とLinköping大学の間では、2012年より学术交流を開始しており、インターンシップのNIMSへの受け入れや若手研究者の行き来を通じて交流を深めてきたところである。今回のセミナーでは、この連携をベースに更なる発展と展開を模索するため、Linköping大学を核としたスウェーデンやドイツの研究者とNIMSを核とした日本の研究者で参加者が構成され、特に、バイオバイセンサー、バイオマテリアル、環境エネルギーなどの応用を目指す研究者とその基礎をなすナノマテリアルサイエンスの研究者が集う形となった。

10日午前中は、Linköping大学のAnthony P.F. Turner 教授の“次世代バイオセンサーのデザイン”に関する基調講演、続いて、小林による“角膜再生のための新規材料コンセプト”に関する発表、午後1番には、JSPSのセンター長であられる阿久津秀雄先生による“エネルギー変換ナノモータータンパクであるF0F1-ATP synthase”に関する基調講演が行われた。基調講演からもおわかりいただけるように、今回のセミナーはスコープを大変広くとり、各分野のマテリアルサイエンティストとバイオセンシング、環境エネルギー、組織再生などの応用を目指す研究者が情報交換を行えるような企画となったため、専門分野内で行われる討議とは一線を画す、大変有意義な情報交流が行われた。

招待講演では、若手研究者を中心にGaN、nanowire、Silicon Carbide、ZnO tetrapodなどのナノ材料発表とその応用に関する発表が行われ、会場から多数の質問があり活発な討議が行われた。夕刻には、運河沿いのレストランで、スウェーデン料理を肴に研究談義に花が咲いたことも申し述べたい。

翌日は早朝からのセッション開始となった。というのも、今回の会議では、テレビ会議システムを利用して日本の研究者が発表を行うe-talkセッションを設け、5名の研究者の方にご参加をいただいたため、時差を考慮して日本の夕刻、スウェーデンの早朝という時間帯の設定となった。早朝にも関わらず多数の聴衆が集まり、スウェーデンからの映像が届けられないというハプニングにも見まわれたが、演者の先生方の臨機応変な対応のおかげで、事なきを得た。スウェーデン会場では、スクリーン上のパワーポイントのプレゼン資料とご講演の先生方の発表内容がクリアに表示され、集まった聴衆とのディスカッションもスムーズに行われ一定の成果を収めたと考える。一般口頭発表の合間には、Linköping大学の学生諸君のポスター発表などもなされ、若手のモチベーションを高めるために、急遽企画者及び有識者による厳正な採点と投票のもと、ベストポスター賞2組3名を選定し、閉会式上で表彰を行った。

本セミナーでは、国、専門分野を問わず胸襟を開いた議論が繰り広げられ、分野間融合、国際共同研究の種付けなどが着実に進んだものと考えられる。このような有意義な交流をサポートしていただいた、JSPSストックホルムの関係者の皆様に深く感謝するとともに、今回の交流をきっかけとした新たな国際連携が進むように継続的に努力してゆく所存である。



小林グループリーダーによる講演

Research Sources on Language Teaching and Politics

- Japanese language education in Pre-war Europe-

横浜国立大学 国際戦略推進機構・教育学研究科 教授 小川 誉子美

このたびは、日本とフィンランドの学術交流の場において、**Research Sources on Language Teaching and Politics: Japanese language education in Pre-war Europe**という題目で講演の機会をいただきました。冒頭から個人的な話で恐縮ですが、この講演では、かつての赴任先ヘルシンキ大学において、赴任をきっかけとして生まれたテーマについてご紹介できたこと、1990年当時の東アジア学科での教え子たちと再会し、現在第一線で活躍する彼らと未来に向けた議論ができたという点で、過去と未来をつなぐ記念すべき機会となりました。

さて、今回はヨーロッパの日本語講座史をテーマに、資料の紹介を兼ね、三つの点について紹介しました。この研究テーマは、当時ヘルシンキを訪問された桑木務先生(1941～44年、ヘルシンキ大学客員教授)との出会いに遡ります。1940年代に行われた講義録など大部の資料を譲り受けたことがきっかけでした。日・欧双方の古文書館資料を渉猟する中、戦間期のヨーロッパの日本語講座について数々の史実が明らかになりました。

講演の一つ目は、この研究の中から、戦間期のドイツ、イタリア、フィンランド、さらに近隣国の日本語教育に、日本政府、民間団体、日本人講師がどう関わったかという点について、当時の日本の広報活動に対する日本人講師たちの評価をまじえながら、その一端を紹介しました。

二つ目は日本語教育の目的についてです。言語の教育は、社会的需要を背景に開設や閉鎖が繰り返されるという歴史をたどってきましたが、草創期のヨーロッパの日本語教育もその例に漏れません。例を挙げると、オランダでは日本の開国前に、イタリアやフランスでは明治維新以前の1863年に日本語講座が開設されていました。特に、フランスやイタリアでは同時期に複数の講座が開講されました。この背景には、19世紀半ばの蚕の微粒子病の蔓延が繊維産業に危機をもたらした、この損失を補うために日本産蚕、すなわち、対日貿易が開始されたという背景がありました。なかでも注目すべきは、『養蚕秘録』(1803、江戸時代の代表的な養蚕指導書)が、すでに19世紀の半ばにフランス語やイタリア語に翻訳されていたことです。日本の技術書第一号ともいえる日本語からの翻訳が異なる訳者の版で出されるほど日本語が研究されていたのです。経済危機の克服という目的は、言語学習の大きな動機付けであったと言えるのです。

三つ目は、言語学者G.J.ラムステッド以降の、フィンランドの日本語教育にゆかりのある人物について、新たな資料と解釈を紹介しました。桑木の着任前に、ラムステッドが研究上必要とする朝鮮語方言の話者、ド・チョンホという人物が日本語講師として候補にあがっていたことは、Halén (1998)によって紹介されていますが、ラムステッドと公使館のやりとりを記録した日本の外交資料から、ドの着任が実現しなかった理由にあらたな解釈が生まれました。

次に、桑木務の講義に出席していたケラヴオリは、戦後、数々の活動を通じて日本を紹介する活動を、桑木もフィンランドを紹介する活動を精力的に行いました。桑木は北欧文化協会の初代会長を務めるなど、一連の活動が評価され、フィンランドからライオン騎士賞が贈られました。ケラヴオリの書簡からは、桑木の一連の活動はケラヴオリによって支えられていたこと、また、ケラヴオリの活動は桑木が全面的に支援していたことが伺えます。日本とフィンランドの文化交流の基盤は、こうした人々の地道な努力によって築かれたことが読み取れるのです。

フィンランドと日本の交流の歴史については、これまでの定説に、あらたな解釈が加えられていく可能性が秘められており、これからの研究に大いに期待したいところです。今回の滞在中には、ケラヴオリについて博士論文を執筆し始めた方や日本研究者、JSPS同窓生らと実りある議論ができました。横浜国立大学の私の研究室には日・欧の古文書館で収集した一次資料や文献を置いています。日本研究史や日欧交流史の研究を進めている方のお役に立てることと思います。

最後になりますが、これまで、日本学術振興会には出版助成や研究助成といった形で多くのご支援をいただきました。『欧州における戦前の日本語講座—実態と背景—』(風間書房)は日本学術振興会の補助金を受けて2010年に公開しました。また、直近の補助金では、ヨーロッパを含む世界各地の日本語教育史研究に関するウェブサイトを作成しました。今後コンテンツの充実と多言語化をはかり、当分野に関する発信をしてまいりますので、関心のある方は、ぜひご活用ください。今回の訪問では、当分野での今後の学術交流の可能性に対し大きな期待を得ることができました。北海道大学ヘルシンキオフィス、JSPSストックホルムオフィス、JSPS同窓会、日本大使館をはじめ、お世話になったすべての方々に心よりお礼を申し上げます。



小川教授による講演

持続可能な製品・サービス開発と提供 — 日瑞協力の有望分野

リンシェーピング大学 経営・工学部門 教授 坂尾知彦

読者諸兄は持続可能性が社会の一関心事項であることをご存知と推察するが、日本とスウェーデン両国には、持続可能性への取り組みにおいて、興味深い共通点と相違点があることをご存知だろうか。本稿では製造業の経済・環境側面の持続可能性に焦点を置いて論を進める。

まず共通点とは何か。途上国が低コストを武器に安価な製品を製造できるようになった一方で、先進国の企業は高付加価値の製品・サービスを開発し提供し続けることが死活問題となっている。持続可能性も製品・サービスの一つの特性である。その意味で、両国の産業界は、持続可能性のさらなる向上という共通の目標を持っている。製造業者にとってこの目標は大きな機会を与え、経営戦略の中に位置付けている企業も多い。しかし現在その実践のための科学的知見は不足しており、理論と実践の双方に対する研究が求められている。

日本では学術会議が2011年に、「資源循環型ものづくりを実現するための学術的指針—地球温暖化対策を主対象に」という報告書を発行している。その中で、製品・サービスのライフサイクルを考慮した設計の重要性を指摘し、学界には更なる資源循環型ものづくり科学の確立を要望している。スウェーデンの工学分野の研究においても、持続可能性は重要なテーマの一つである。国内の産官学共同のイニシアティブにProduction 2030¹があるが、6つの重点テーマの内の2つが持続可能な製品・サービス開発に関するもの（Environmentally Sustainable ProductionとProduct- and Production-based Services）である。公的な研究プロジェクトのほんの一例であるが、Mistra (The Swedish Foundation for Strategic Environmental Research)が資源効率向上のための製品・サービス開発の分野で本年、企業の出資を含めて9億円の大型プログラム(4年間)を開始する²。このように、両国共本テーマを重要なものと設定して取り組みを進めている。

1: www.produktion2030.se

2: www.mistra.org/aktuellt/nyhetsarkiv/2015-03-25-42-miljoner-till-forskning-om-produkt-design-och-resurseffektivitet.html



写真: Toyota Material Handling (在スウェーデン・ミョールビー) のフォークリフトのRemanufacturingプロセス(Toyota Material Handlingより許可を得て掲載)

両国では製造業の取り組みとして、Remanufacturingを実践している企業が見られる。Remanufacturingとは使用済製品を回収し、寿命の切れた部品の交換や製品全体のコンディショニングを再調整し、新品と同様の品質を確保して、再度使用できるようにするエンジニアリング活動である。再利用する部品を作るための資源・エネルギーが不要のため、その分の環境負荷を削減できる。

例えば、スウェーデンではVolvo Partsが自動車用エンジンを、Toyota Material Handling グループがフォークリフトを、日本では富士ゼロックスがコピー機をRemanufacturingし、多くの顧客が使用済部品・製品を再度利用している。

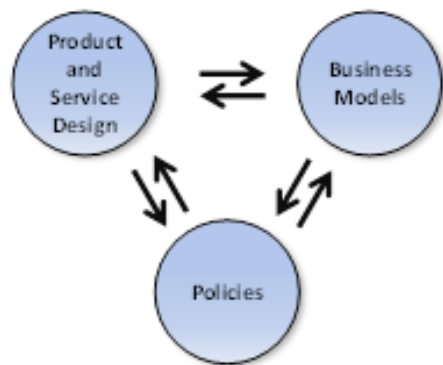
一方、相違点も見られる。日本では、家電リサイクル法が2001年から施行された。本法は、欧州の関連法規制には無い特色を持っている。特に製造業者によるリサイクルが義務付けられている。本法や資源有効利用促進法は製造業者の製品開発に、分解しやすい製品や省資源製品の設計実現など、大きな影響を与えた。その結果日本は2008年には、家電から74-89%の素材リサイクルを実現³し、素材のリサイクルにおいて世界で最も進んだ国と言われている。また、Remanufacturingされた製品に対する顧客の受容性も、両国で異なると言われている。これらが取り組みに見られる相違点の例である。

3: www.env.go.jp/en/recycle/smcs/a-rep/2010gs_full.pdf

(次頁へつづく)

このような相違を見ると、持続可能な製品・サービス開発と提供のためには、それを取り巻く法規制やビジネスの諸条件という要素に影響を受けることが判る。そのため、本問題を扱う際にはそれらを考慮することが不可欠である。そういう意味で本分野では、ビジネスの諸条件や法規制の異なる両国が、お互いの実践経験から学ぶことは多々ある。実際にスウェーデン政府の議会への製造研究に関する提出議案の中でも日本との共同研究が推奨されている(2008年)⁴。

先に述べたMistraの新プログラムでは、企業の製品・サービス、ビジネスモデル、関連法規制という異なる3つの要素を各々研究するだけでなく、それらの関連性を踏まえた新たな知見を作り出すところに新規性がある。本分野で両国の研究協力は、従来さほど行われておらず、この文脈において進められることが期待される。



図：持続可能な製品・サービス開発と提供のために考慮すべき相互作用(Mistra REES研究提案書より引用)

4: The Government's bill to Parliament on Production (2008)

コラム(1) ~ Royal Wedding ~



2015年6月13日、ストックホルムにおいてスウェーデン国王カール16世グスタフ陛下の第一王子であるカール・フィリップ殿下とソフィア・ヘルクヴィストさんの結婚式が執り行われた。

王子の王位継承権は、姉のヴィクトリア皇太子殿下、その第一子であるエステル王女殿下に続き第3位。スウェーデン王室では、2010年のヴィクトリア皇太子殿下、2013年の妹のマデレーン王女殿下と御成婚が続いている。高円宮妃殿下がガムラスタン(旧市街)にある王宮のチャペルにて執り行われた結婚式に御参列された。



高円宮妃殿下の御接見

カール・フィリップ王子殿下の結婚式に御参列のために高円宮妃殿下がストックホルムを御訪問され、6月13日、グランドホテル モーテン・ヴィングの間に於いて在瑞邦人と御接見された。学術関係、文化芸術関係、日本人会関係の方々22名が出席し、森元誠二在スウェーデン日本国大使による各人の紹介の後、懇談され、最後に妃殿下から労いと励ましの御言葉があつて、御接見は終了した。

写真: Mattias Edwall撮影, © Kungahuset.se

コラム(2) ~ 吉祥? 白黒付かないカササギ ~

カラスよりひとまわり小さく白黒が鮮やかな鳥を、スウェーデンではよく見かける。

この鳥は、日本ではカササギと呼ばれ、主に九州地域に生息している。スウェーデン語ではSkata、英語ではMagpieと呼ばれる。欧米では伝統的に「おしゃべり好き」のキャラクターを与えられている他、俗説では、光るものを集める習性があると言われ「泥棒」とも呼ばれる。オックスフォード英語辞典でも、Magpieの比喩的な意味として「(不要な物の)収集に執着する人」「無駄話をする人」を表すとしている。また、白黒の体が邪悪であり、悪魔に奉仕するという俗信が欧州各地にあり、スウェーデンでは魔女が外出する時にはカササギに変身すると言われている。

その一方、中国では「喜鵲」と呼ばれる。姿態がしなやかで鳴き声が高く、七夕物語の中では天の川に橋をかけて織姫と彦星の出会いを手助けする鳥であるため、人々はカササギを吉祥の鳥とした。韓国でも嬉しい便りをもたらすとされ「国鳥」となっている。日本においても鳴き声が「かちかち(勝ち)」と聞こえることから「カチガラス」とも呼ばれ縁起の良いものとされる。

所変われば、全く正反対の印象を持たれている興味深い鳥である。



その他打合せ・来会等

北海道大学 金城政孝教授・高木由紀URAステーション特任助教の来会(3月9日)

金城政孝北海道大学先端生命科学研究院教授および高木由紀同大学創生研究機構URAステーション特任助教が、当センターを訪問した。

スーパーグローバル大学等事業の一環として実施される「北海道大学 Summer Institute」および「北海道大学ラーニングサテライト」について説明があり、意見交換を行った。



「第二回北極圏実地踏査ミッション」への参加(3月13日)

阿久津センター長、川窪副センター長が、在フィンランド日本国大使館主催の「第二回北極圏実地踏査ミッション」に、北極圏に関係のある日本の企業関係者や研究者と共に参加した。同ミッションではオウル大学を訪問し、同大学の概要や日本の大学との関係について説明を受けた。また、レスカ地域 (Reska Area) でエコハウスを視察した他、オウル市長主催昼食会に出席した。

野口聡一宇宙飛行士との夕食会を開催(4月20日)

第28回 世界宇宙飛行士会議(*)の準備のため来瑞中の野口聡一宇宙飛行士を囲んで夕食会を開催した。夕食会には、佐藤政文 在スウェーデン日本国大使館一等書記官、阿久津センター長、川窪副センター長、廣瀬国際協力員、村上国際協力員、タシマ職員が参加した。野口宇宙飛行士から、宇宙ステーション滞在中やトレーニングでの経験をお話いただき、参加者にとって大変貴重な時間となった。

(*)2015年9月20日～27日に、ストックホルムにて開催予定の宇宙探検家協会 (Association of Space Explorers: ASE) 主催の年次総会。ASEは、1985年に設立された宇宙飛行士による唯一の国際団体。現在36の国から395名以上の協会員が在籍する。野口宇宙飛行士は、2014年9月にアジア人初の会長に就任した。

宇宙探検家協会ホームページ <http://www.space-explorers.org/>



ウメオ大学を訪問(4月21日)

阿久津センター長、川窪副センター長がウメオ大学を訪問し、Gunnar Öquist名誉教授に旭日重光賞受賞について改めてお祝い申し上げますと共に、Gustafssonウメオ大学学長、Sommarin副学長らと意見交換を行った。Gustafsson学長からは、同大学の戦略についてプレゼンがあり、スウェーデン国内外の大学との連携を強化し、学生・研究者を引き付けることにより、大学の質を高めて国内トップの大学を目指しているとの説明を受けた。



また、同大学の生物科学系の各研究室やセンターについて、それぞれ担当の研究者から概要説明を受けた。Gunnar Öquist名誉教授には、訪問スケジュールを全てアレンジしていただき、当日は全行程に同行いただいた。

(ウメオ大学HPでの記事:スウェーデン語のみ)

<https://www.aurora.umu.se/Nyheter/2015/4/japansk-delegation-besokte-umea-universitet/>

日本学術振興会 人物交流課 貴船職員、金子職員の来会(4月28日)

JSPSサマープログラムプレオリエンテーションのため来瑞中の日本学術振興会 国際事業部 人物交流課企画調整係 貴船永津子職員、金子めぐみ職員が当センターを訪問した。フェローシッププログラムやサマープログラムプレオリエンテーションの実施方法や課題について意見交換を行った。



東京工業大学 加藤隆行国際部長、池田充代総務課主任の来会(5月7日)



シャルマーシュ工科大学で開催のMolecular Frontiers Symposium、Nobel Workshopに参加のため来瑞中の加藤国際部長、池田主任が当センターを訪問した。

東京工業大学で進められているガバナンス体制の改革、教育システムの国際化、国際的な研究活動の刷新について説明があり、意見交換を行った。

ノーベル財団、ノーベルメディア、ノーベル博物館関係者との昼食会(5月13日)

阿久津センター長、川窪副センター長が在スウェーデン日本国大使公邸で行われたノーベル財団、ノーベルメディア、ノーベル博物館関係者との昼食会に参加した。

本会合では、3月に東京で開催された「ノーベルプライズ・ダイアログ・東京」の成果及び日・スウェーデン間の科学技術交流等について意見交換を行った。



大阪大学 吉森保特別教授の来会(6月1日)



ウメオ大学における講演のため来瑞中の吉森 保 大阪大学大学院生命機能研究科・医学系研究科特別教授が当センターを訪問した。

川窪副センター長から、当センターの活動内容の説明を行い、その後、外国人研究者招へい事業等や国際交流について意見交換を行った。

日本人研究者3名がマルクス・ヴァーレンベリ賞を受賞

2015年3月16日、マルクス・ヴァーレンベリ財団は、2015年マルクス・ヴァーレンベリ賞の受賞者として、高いエネルギー効率でナノファイブリル化セルロースを生成する方法を開発し、エネルギー要求量を劇的に下げるという革新的な発見をした磯貝明東京大学教授、齋藤継之同准教授、西山義春フランス国立科学研究庁植物高分子研究所(CERMAV-CNRS)上級研究員を選定したことを発表した。アジア地域の研究者、日本人として初の授賞となる。

同財団は、1980年に、ヨーロッパ最大の製紙・木材販売会社Stora Kopparbergs Bergslags Aktiebolag(現ストラ・エンソ社)によって設立され、森林や木材科学における基礎研究や利用技術の研究開発を奨励するため1981年から賞が授与され始めた。長く同社の取締役を務めたマルクス・ヴァーレンベリ氏の功績を称えたものである。「森林/木材科学分野のノーベル賞」または「森のノーベル賞」とも言われる。

2015年9月28日にストックホルムにおいて、スウェーデン国王・王妃御臨席の下授賞式が開催され、2百万SEK(約2千9百万円:2015年5月25日現在)が授与される。



左より磯貝東京大学教授、西山CERMAV上級研究員、齋藤東京大学准教授
(マルクス・ヴァーレンベリ財団HPより転載)

マルクス・ヴァーレンベリ財団

<http://mwp.org/>

東京大学 大学院農学生命科学研究科

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/news/2015/20150330-1.html>

ノーベル賞2015 発表日程の決定

2015年ノーベル賞各賞の発表日程が決定し、ノーベル財団ホームページ上で公表された。今回発表されたのは「生理学・医学」「物理学」「化学」「平和」「経済学」各賞の日程で、「文学」の発表は例年どおり後日発表される予定である。それぞれの発表日程は以下のとおり。

生理学・医学賞

日時:10月5日(月)11:30

場所:カロリンスカ研究所

平和賞

日時:10月9日(金)11:00

場所:ノルウェーノーベル委員会

物理学賞

日時:10月6日(火)11:45

場所:スウェーデン王立科学アカデミー

アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞(経済学賞)

日時:10月12日(月)13:00

場所:スウェーデン王立科学アカデミー

化学賞

日時:10月7日(水)11:45

場所:スウェーデン王立科学アカデミー

ノーベル財団 HP

<http://www.nobelprize.org/>

Olli Kallioniemi教授がSciLifeLab(*)新Directorに就任

SciLifeLab理事会は、2015年7月1日よりOlli Kallioniemi教授が新Directorに就任すると発表した。

Kallioniemi教授はタンペレ大学(フィンランド)にて修士号、博士号を取得後にカリフォルニア大学(サンフランシスコ校)、NIH National Human Genome Research Instituteにて研究を続けた。その後、トゥルク大学にてVTT Technical Research Centreと共にMedical Biotechnology Groupを立ち上げた。2007年にヘルシンキ大学のInstitute for Molecular Medicine Finland(FIMM)の初代Directorに就任し、同機関が国内外の研究をリードする機関に成長し、Nordic EMBLのフィンランド担当機関となるのを見届けた。研究分野は癌生物学およびゲノミクス、分子病理学およびトランスレーショナル・リサーチ、ハイスループット技術開発とデータ解析にまたがる。

また、＜P4医療＞予測(Predictive)、予防(Preventive)、個別化(Personalized)、参加型(Participatory)の強力な推奨者である。

*SciLifeLab(Science for Life Laboratory)は、2010年に設置され、2013年に政府によってナショナルセンターとして位置づけられている。健康と環境に焦点を絞った分子生物科学研究拠点である。

SciLifeLab HP

<http://www.scilifelab.se/>



デンマーク：EU Horizon2020事業から11億デンマーククローネの資金を獲得

Horizon2020(*)事業開始の年である2014年、デンマークの企業・研究者・公的機関は11億DKK(約198億円)以上の資金を獲得し、それにより約300の研究開発プロジェクトに支援を行った。この金額はデンマークにおける研究開発資金全体の2.3%となる。

デンマーク政府は、事業期間である2014年～2020年の資金獲得目標を2.5%に設定している。また、政府は、研究機関間の強力なネットワークが同事業の資金獲得におけるキーポイントであるとし、ネットワーク構築活動等を対象に、3千万DKK(約5.5億円)の支援を行うとしている。

*Horizon2020: 2014年から7年にわたり総額約800億ユーロ(約10兆円)の資金助成する欧州連合(EU)の事業で、EUのこれまでの研究・技術開発枠組み計画の中で最大規模を誇る。多国間研究開発・イノベーション促進プロジェクトで、産業と学術研究を結びつけることを狙いとしている。



Horizon2020ウェブサイト

<https://ec.europa.eu/programmes/horizon2020/en>

ノルウェー：第5回 日本・ノルウェー科学技術協力合同委員会

2015年2月11日、オスロ(ノルウェー)において第5回 日本・ノルウェー科学技術協力合同委員会が開催された。合同委員会には、日本、ノルウェー両政府の関連省庁及びファンディング機関や教育研究機関から多くの代表者が出席し、日本学術振興会(JSPS)からは国際事業部研究協力第二課小山専門員と鈴木同係員が参加した。

本合同委員会では、ノルウェー教育研究省、内閣府及び文部科学省による、日・ノルウェーの科学技術・イノベーション政策における最近の進展の共有から始まり、続いて既存の4つの優先協力分野(「エネルギー・環境」「ナノテクノロジー・新材料」「水産物の安全性」及び「極地・宇宙研究」)における進捗状況を振り返った後に、今後の協力の機会や優先事項について議論された。

日本政府とノルウェー政府との間の科学技術協力協定の発効以来(2003年)、日本とノルウェーの機関間の科学技術協力は着実に増加しており、またファンディング機関間の協力も近年強化されていることを踏まえ、両国議長は、二国間の関係を深めるのみならず、地球規模課題への対応にも貢献できるような日・ノルウェー両国の協力関係の更なる発展への期待を示した。

ノルウェー：日本を含む8か国との国際交流プログラムに7千万ノルウェークローネ

The Research Council of Norway(RCN) とthe Norwegian Centre for International Cooperation in Education(SIU)の連携の下、優れた研究の国際交流を促進する新たなプログラム「International Partnerships for Excellent Education and Research (INTPART)」が実施されることとなった。RCNとSIUによる支援規模は、7千万ノルウェークローネ(約11億円)となる。同プログラムは、研究機関間の国際交流を促進するとともに、あらゆるキャリアの段階にいる学生・研究者に国際交流経験の道を与えるものとなる。

同プログラムでは、高等教育、研究及びイノベーションにおいて世界レベルのノルウェー人研究者を多く育てることを目的としており、ヨーロッパ以外の8つの国(ブラジル・カナダ・中国・インド・日本・ロシア・南アフリカ・アメリカ)を対象に長期的な科学協力を推進することを目指している。

ノルウェーリサーチカウンシルウェブサイト

<http://www.forskningsradet.no/en/Funding/INTPART/1254007332027/p1184150364108?progId=1254007331831&visAktive=false>

ノルウェー：英語能力低下の傾向

Education First(EF*)の実施した英語能力調査によると、トップ5にスカンジナビア3か国が入った。デンマークが1位(EPIスコア*69.3)、続いてオランダ(EPIスコア68.98)、スウェーデン(EPIスコア67.8)となった。ノルウェーについては、5位にランク付けされたものの2011年に記録されたEPIスコア69(1位)からポイントを5%大幅に下げた結果となった。EFによる分析では、ノルウェーは、“大変高い習熟度”を有する国に分類されているものの、スコアの降下傾向を如実に示しているとされた。

この指標は、2011年から、63の国・地域において75万人のデータをもとに算出されている。傾向としては、欧州地域の英語能力は他の地域に比べるとはるかに高く、収入、生活の質、ビジネスの利便性、インターネットの使用量、学校教育年数と英語能力には相関関係があると分析されている。

*Education Firstは、1965年に創業し、現在52か国に500の学校と事務所を有する言語教育・学術プログラム・文化交流に特化した世界有数の教育関連企業である。

*EPIは、English Proficiency Indexの略で、テスト受験者の文法、語彙、リーディング、リスニングの4技能について総合的に数値化したものである。

EF English Proficiency Indexホームページ

<http://www.ef.co.uk/epi/>

フィンランド：ギャップイヤーは、その後の大学生活に悪影響はない

高校卒業と大学入学の間の1年間にギャップイヤーを取得することは、その後の大学への熱意やパフォーマンスを弱めることはない。一方で、高校から直接大学に入学する学生は、ギャップイヤーを取得する学生よりも研究に対してよりレジリエンス(困難な状況でもしなやかに適応して伸びる力)があり、目標に向かって熱意を傾けているが、より

ストレスを抱えていることがフィンランドアカデミーの研究プログラム「The Future of Learning, Knowledge and Skills (TULOS)」によって明らかにされた。



調査の結果、ギャップイヤーを取得することは1年間だけに限って言えば悪影響はないが、1年以上のギャップイヤーを取った場合、学習意欲の低下や順応に困難が生じ、新しい学習環境への移行が難しくなるとされた。

また、調査結果では、ギャップイヤーを取る学生がそうでない学生に比べて中退することが少し多い傾向にあることも示された。

フィンランドアカデミー ウェブサイト

<http://www.aka.fi/en/about-us/media/press-releases/2015/a-gap-year-does-not-weaken-study-success/>

フィンランド：留学生が選ぶ欧州での留学先NO.1に選ばれる

The International Study Choice Platform Study Portalsの実施したヨーロッパにおける留学生約7000人による投票「学生満足度アワード2014」でフィンランドがトップとなった。満足度では、10点中平均9.2点であった。

トップ3にはスウェーデン、デンマークが入り、両国とも満足度で平均9.1点であった。フィンランドで勉強する留学生は、高い教育レベルと教員に満足しており、留学生にとって重要であるサービスについても非常に良いフィードバックがあった。

今回の調査でトップとはなったが、さらに改善の余地はある。ネガティブな意見としては、天候、文化、交通手段および高い物価が挙げられた。

Study Portalsウェブサイト

<http://www.studyportals.eu/research/student-satisfaction/articles/887/studyportals-awards-2014-finland.html>

アイスランド：エネルギー問題について、日本へ助言

日本における原子力発電の問題は、福島第一原発事故以来、重要な論点となっている。現在、日本ではその問題を前進させる方策をアイスランドに見出そうとしている。北大西洋の島国であるアイスランドでは、地熱発電等の再生可能資源を利用したものが国の発電の大部分を占めている。今回東京を訪問したアイスランド代表団は、再生可能エネルギー発電や地熱発電産業を成功に導いた方策について紹介した。

在京アイスランド大使館の発表によると、地熱発電用プールを多数建設して地熱発電を行うことにより消費電力全体の39%を賄うことが可能で、4億8千万～8億4千万米ドル(約595～1,043億円)に相当する発電が可能であるという。

また、アイスランド国立エネルギー協会(Orkustofnun)によれば、北欧の国で生産される総エネルギー量の約4分の1は地熱発電によって生成されたものであり、2011年には、およそ総電力消費量の84%は、何らかの再生可能資源で発電されたものであった。

アイスランド大使館のHalldor Elis Olafsson氏は、「地熱発電所の多くは国定公園に隣接しており、近隣の人々に雇用機会を提供でき、経済効果もある。」と述べた。

IceNewsウェブサイト

<http://www.icenews.is/2015/04/08/iceland-advises-japan-on-global-energy/>

エストニア：タルトゥ大学がQSランキング地域版で5位にランクイン

QS大学ランキング(*)新興ヨーロッパ・中央アジア版において、モスクワ大学(1位・ロシア)、プラハ・カレル大学(2位・チェコ)、ノヴォシビルスク大学(3位・ロシア)、ワルシャワ大学(4位・ポーランド)に続いて、エストニアのタルトゥ大学が5位となった。同国のタリン大学も26位にランクされている。

「このように高いランクは、大学全体に対する素晴らしい評価であると同時に、我々の研究力と教育力が高いことの証明となった。エストニアの高等教育が急速に成長していると認識されていることは、とても喜ばしいことである。」とタルトゥ大学国際協力部長Reesi Lapa氏は述べた。

他のバルト諸国の大学については、リトアニアからはヴィリニウス大学の32位を筆頭に4つの機関がTOP100に入り、ラトビアからは、唯一ラトビア大学が41位にランクインしている。

ランキング方法は、教職員による評価、教員と学生の比率、博士号を持つ職員の割合、留学生数等で複合的に算出されている。

(*)QS大学ランキングは、Quacquarelli Symonds Ltd. (QS)によって2010年より発表されている世界大学ランキング。QS社は、ロンドンに本部を置くグローバル企業で、高等教育関連の情報をウェブサイトやイベント等を通じて発信している。

QS ウェブサイト

<http://www.qs.com/>

QS大学ランキング新興ヨーロッパ・中央アジア版

<http://www.topuniversities.com/student-info/university-news/top-100-universities-emerging-europe-central-asia>

“KI Bladet” ~2015 NO.1~

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

ハムステン学長による2015年の展望

ハムステン学長は、2015年の展望について以下のとおり述べた。

2015年はカロリンスカ研究所にとって刺激的で、挑戦的かつ重要な1年となる。我々はStrategy 2018(*)の達成に向けて機関を挙げて取り組んでおり、ストックホルム県議会とのThe Regional ALF agreement(*)に係る議論は本格化し、次世代の研究・教育・医療を形作るプロジェクトに深く関わる職員は増えている。

また、カロリンスカ大学病院は、唯一無二の重要なパートナーであり、お互いの事業を効率的に統合できれば、大きなチャンスが待っている。さらに、その他の研究・教育を行う病院等、新たなパートナーも開拓し続けなければならない。そのためには、臨床研究、教育、医療、イノベーション、そして知識の応用と普及に関する戦略の共有が重要である。

* Strategy2018:

2014年より開始された、大学の教育と研究の質の向上を目的とするKIの5か年計画
<https://internwebben.ki.se/en/strategy-2018>

* The Regional ALF agreement :

2007年にKIとストックホルム県議会で締結し、2014年に更新された連携体制構築にかかる協定



Urban Lendahl氏がノーベル委員会「生理学・医学部門」の事務総長に就任

2014年末に、Urban Lendahl氏がノーベル委員会「生理学・医学部門」の新しい事務総長となることが発表された。Lendahl氏はGöran K.Hansson教授の後継者として、2015年1月より業務を開始した。

Lendahl氏は、カロリンスカ研究所 細胞・分子生物科学部の遺伝学の教授である。2000年7月からカロリンスカ研究所ノーベル賞アッセンブリーのメンバーであり、2007年～2013年にはノーベル委員会生理学・医学部門委員、さらに2012年にはノーベル委員会委員長を務めている。

なお、前任者のGöran K.Hansson教授は、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)の事務総長に任命され、2015年7月よりこの任に就くこととなっている。

ノーベル賞委員会生理学・医学部門

<http://www.nobelprizemedicine.org/selecting-laureates/the-nobel-committee/>

Nobel Assembly

<http://www.nobelprizemedicine.org/>

寄付により、香港に再生医療研究拠点を設立

カロリンスカ研究所は、香港在住のビジネスマンMin Wai Lau(劉鳴煒)氏からの5千万米ドル(約60億円)の寄付を受けて、香港に研究拠点を設立することとした。

Min Wai Lau再生医療センターは、ストックホルムと香港の2つの拠点を繋ぐこととなり、香港、中国をはじめ世界中の研究者がカロリンスカ研究所支援の下で共に研究をすることとなる。



Min Wai Lau氏
(KI Bladet より 転載)

プレスリリース資料

<http://news.cision.com/karolinska-institutet/r/karolinska-institutet-establishes-research-base-in-hong-kong-and-china-after-record-donation,c9716105>

研究室から市場へ -KI Innovationsの支援-

KI Innovationsは、1996年に創設され、研究者のアイデアを市場に売り出すことを支援している。カロリンスカ研究所の研究者をはじめ、スウェーデン国内、北欧諸国の大学の研究者はこれらの支援を無料で受けることができる。

KI Innovationsでは、1年間に約50件のプロジェクトを審査しており、審査の結果選ばれた約25件のプロジェクトのうち、4～5件のプロジェクトが企業を設立し、外部からの資金援助または共同研究支援を受けている。2014年に採用されたこれらのプロジェクトは約1億クローネ(約15億円)の外部資金援助を受けた。



KI Innovationsホームページ

<http://karolinskainnovations.ki.se/>

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。

<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

2015年度第1回 KVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立科学アカデミー (KVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、KVA-JSPSセミナーが開催されます。

日 時: 2015年7月17日 (金) リンショーピン

2015年7月20日 (月)～7月23日 (木) ヨーテボリ

会 場: Linköping University(Linköping) およびChalmers University of Technology(Göteborg)

講演者: 幾原 雄一 東京大学工学系 教授

Lars Hultman リンショーピン大学教授

Eva Ohlsson シェルマーシュ工科大学教授 他

スウェーデン同窓会セミナーの開催

JSPSスウェーデン同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、「Japanese Ethics and Technology」をテーマとしたセミナーが開催されます。

日 時: 2015年9月2日 (水)～9月3日 (木)

会 場: ウプサラ大学

講演者: 間嶋 崇 専修大学経営学部 准教授 他

※セミナー・シンポジウムに関する詳細は、決定次第JSPSストックホルム研究連絡センターHPに掲載されます。

大野 泉 政策研究大学院大学教授を招へいしたイベントについて

(1) Stockholm Seminar on Japan

日 時 : 2015年9月30日 (水) 15:00～16:30

会 場 : スtockホルム商科大学 Ohlinrummet

共催機関: スtockホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)、在スウェーデン日本国大使館、Swedish Institute of International affairs、スtockホルム大学、JSPSスtockホルム研究連絡センター

テーマ : Development Cooperation in a Post-MDG Era: Can Japan effectively (continue to) contribute to global development?

講演者 : 大野 泉 政策研究大学院大学 教授

Marie Söderberg スtockホルム商科大学欧州日本研究所長 他

(2) International Conference "Japanese and Nordic Perspectives of Development Cooperation in a Post-MDG Era"

日 程 : 2015年10月1日 (木)～10月2日 (金)

会 場 : スtockホルム商科大学, Ohlinrummet

主 催 : スtockホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)

テーマ : Japanese and Nordic Perspectives of Development Cooperation in a Post-MDG Era

講演者 : 大野 泉 政策研究大学院大学 教授

高橋基樹 神戸大学教授、日本国際開発学会会長

Annette Skovstedt Hansen オーフス大学(デンマーク)教授

杉田米行 大阪大学 教授

Bart Gaens The Finnish Institute for Foreign Affairs(フィンランド)教授

Paul Midford ノルウェー工科大学(ノルウェー)教授 他

事業のご案内

二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者(若手研究者を含む)が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

平成28年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei_bosyu.html (日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/call.html> (英語版)

外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成28年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。 <http://www.jsps.go.jp/j-fpo/index.html> (日本語版)

着任のご挨拶

廣瀬 良子 国際協力員

4月よりJSPSストックホルム研究センターに着任いたしました。ストックホルムを訪れたのは初めてですが、きれいな街並みと優しく接しやすい街の人たちに囲まれ、快適な生活をおくることができている。北欧・バルト諸国と日本との学術研究交流の推進に少しでも役に立てよう精一杯頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。



村上 道子 国際協力員

4月からストックホルム研究連絡センターで勤務させていただくことになりました。こちらの春は東京と比べると寒く、雪が舞う日もありますが、桜を初めてとする季節の花が咲いています。

1年間驚きと発見の連続になりそうですが、それを楽しみつつ、学術交流の架け橋となれるよう勤めて参りたいと思います。よろしくお願いいたします。



その他

カロリンスカ研究所同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx?AcceptsCookies=yes>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jspsto@jspsto.com までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真: Kungsträdgården(王様公園)の桜

4月18日、ストックホルムの中心部にある、Kungsträdgården(王様公園)においてストックホルム日本人会主催で開催されたさくら祭りは、地元の人は勿論、観光客も和太鼓、着物ファッションショー、居合の演武など様々な日本文化を楽しめる機会となっていた。

(撮影 廣瀬良子)

JSPS Stockholm Newsletter 第46号

編集長: 川窪 百合子

編集: 廣瀬 良子

発行日: 2015年6月18日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <http://www.jspsto.com/> E-mail: jspsto@jspsto.com

JSPS
STOCKHOLM